

不思議な不思議な 夏の後で



金色の輪が
私の右手に
握られているのは天使
の冠を私が盗んだ証拠
でしょう ii

島さち子の
世界を護る会

不思議な 不思議な

夏のあとで！

「不思議な、不思議な夏の後で！」

不思議な、不思議な夏が過ぎていきます！

今年もまた、不思議な、不思議な夏が過ぎていきます。

8月13日深夜、玄関から蟬が訪れ、一泊して14日朝6時半、リビングの窓から元気に飛び立って行きました。同じことが島さち子の没後三年、続いています。多少日にちに違いはありますが、といつても、9—10日 12—13日、13—14日で、時は8月、お盆の最中です。玄関ドアから入り、照明のまわりを飛び回った後、ハイビスカスの木に止まって、わたしの話や歌を嬉しそうに聞いた後、静かに眠り、早朝、元気に飛び立って行きました。恒例の行事のように、同じスタイルで時は過ぎていきました。

何故か、わたしは、そのセミを、島さち子だと信じ、疑いを持つことはありませんでした。

彼女が土のなかで、長い年月、幼虫で過ごした筈はないのですから、こんなにも儂い蟬に心を寄せていると考えるしかありません。シャイで、気弱な彼女はオス蟬にとりつくのは苦手らしく、昨年、深夜玄関で、鳴き続けドアを開けた時はオスでしたが、後は二度ともメスらしく、チャッ、チャッといった短い鳴き声しかたてませんでした。何だか鳴き声を聞いたような気がして、ドアを開けたのです。蟬にとりつくにしても、苦労しているのではないかなどと、心配したりしました。

死後の世界がどうなっているのか、わかりませんが、彼女の書いた「いとしのカメレオン」に類似していることに驚いています。

もつとも、あれは、蝶に変身したのですか？

蝶なら、わかる気がします、でも、1週間くらいしか生きられない蟬を何故選んだのでしょうか。それは、声が出るからではないかと、言葉があるからではないか、などと考えたりしています。すべてを偶然と考えるには、多くの疑問が残ります。

今まで最上階の我が家に、一度も蟬が訪れたことはありませんでしたし、このような、人懐っこい蟬に出会ったこともありません。今年もまた、不思議な不思議な夏が過ぎようとしています。

まだ、まだ、不思議な不思議な夏はつづいています！

まだ、まだ、不思議な、不思議な夏はつづいています！！ 連日現れていた蝉は、8月31日、現実には、現れませんでした。何度出てみても、どんなに眼を凝らして見ても、今度こそ、通路にも表札の横にも、もはや、何もの姿もみえません。

ほっとした思いもあって、安心して眠りにつきました。ところが、枕元に蝉がひらひらと舞い降りたのです。あら、こんなところにいたの？ はっとして起き上がりました。

でも、その時、眩暈に襲われ、自分の異常に気がつきました。体中が火のように熱いのです。熱中症だ？ 大急ぎで切っておいたエアコンをいれ、水を飲み、氷で冷やし、できる限りの対処をしました。扇風機が熱くなった空気をむなしくかき回していたのです。水道の水もお湯のようでした。

体温も、血圧もあがっていました。落ち着いてから探しましたが何処にも蝉の姿はありません。

命がけの行為ともしらず、エアコンの熱でベランダの花が全滅しそうで、エアコンを切っていたのでした。蟬に、命を救われたのでは？

「サテウルヌスの孫」の登録が完了しました。島さち子はこの作品を気に入っているようでした。わたしも、この作品が大好きです。

「何度も死んだようだけど？」というと、「あら、人間は何度も死ぬものなのよ。矛盾だなんて？ 矛盾のない世界なんてないもの。矛盾のあることが、作品の厚みになる、そう思わない？」
と、真面目にいいました。彼女にそういわれれば、そんな気がしてくるから不思議でした。

肉親が、恋人が死の病にある場合、どんなに、優しくしてもやさしすぎるといふことはない、知っていながら、かえって、逆の行為をしてしまうもの。

作品のなか、たわいのない独り言が真実を突いているように思えてなりません。

（続）不思議な不思議な夏のあとで！

不思議な不思議な夏のあとで。今、わたしの宝石箱には、小さな蟬が一匹おさまっています。体長は四センチ、巾一・六センチ。今年訪問してくれた油ゼミとくらべると、3分の1か4分の1位の、本当に小さな蟬です。

羽は透明で、羽には、等間隔に赤い筋のような縁取りがあります。ことに背の部分は美しい、鮮明な赤だったので、毎日退色したのか、今では褐色という方が正しいのかもしれない。

今日はこの蟬の由来について、お話して見ましょう。

不思議な不思議な物語には、わたしの脳細胞に刻まれた記憶のほかには、何一つ証拠は残されていないのですから
…。

これは、昨年8月22日午前3時頃、人の気配がして玄関ドアを開けたところ、蟬がドアから入って、リビングのミニシクラメンに止まりました。くまゼミなのか、つくつくぼうしなのかよくは、わかりません。

わたしが話しかけると、目を金色にぼーっと輝かせ、前肢をしきりに動かして意志を伝えようとしていました。でも、前肢は、骨折しているようでした。蟬が動く度に、光線の具合で、雲母状の四角が透明な羽の全面で、キラキラと光るのでした。

蟬の真剣さが、ただならない雰囲気で、わたしを包みこんでいましたから、気づかずにいたのですが、ふと気づくと、外、中空でクマゼミの鳴き声が延々と、ひびきわたっていました。そう大な儀式が始まったような……。そんな気がしました。

蟬はだんだん足の動きも鈍くなり、目も光を失い、荘厳な響きのなかで動かなくなっていました。それが、この蟬のご臨終でした。

宝石箱におさまっているのは、その蟬です。

蝉は遺言として、わたしに、何をつたえようとしていたのでしょうか？

ナズナズのように、わたしは今でも、そのことを考え続けています。

10日間ブログをお休みしました。その間にアクセスしていただいたみなさんに有難うと申しあげます。このタイトルで、ブログを再開して見ようかなとも、思ってみたりしています。

はじめて、ブログに訪問していただいた方は、タイトル、8月28日の「不思議な不思議な夏がすぎっていきます!!」と、9月3日の「まだ、まだ、不思議な不思議な夏はつづいています!!」をご覧ください。

続) 不思議な、不思議な夏の後で！ (2)

不思議な、不思議な夏の後で、わたしは、2010年11月4日、ベランダで一匹の蟬の火葬を行いました。前日、3日の文化の日は、ブログの調子が悪くて、投稿をあきらめ、4人の来客があるので朝から多忙をきわめています。

2才の子供が主役で、みんなで手をつないでダンスをしたり、会食をし、楽しい時間を過ごしました。客たちは、来たからには何か役にたつことをしたいと考えたのでしょうか。

「リビングの照明が一つ曲がっているから直してあげる！」と言い出したのです。

リビングの照明は一对の円盤型のもので、天井から吊りさがっています。一方が水平でない、偏ついていると言うのです。気にはしていたのですが、大掃除のときにでもと放置してきたのです。

天井からはずしていた背の高い女医の娘が、叫びました。

「セミだ！」照明のなかに蟬が入っているというのです。わたしははつとしました。蟬なら、8月18日以来行方不明になった蟬が一匹いたのですから……。

玄関ドアから入ってきたまま、どんなに探しても、探しても、行方のわからなくなった蟬がいたのです。

どんなに探したかしれません、蟬が照明の中にはいるなんて！何故、照明のなかで、羽ばたいてくれなかったのでしょうか。

悔やまれてなりません。その事実さえ架空のこととして、棚上げしてしまっていたのですから……。

蟬は長い間、電気の熱にさらされて、透き通るような、ベージュ色で、半分は消えかかっていました。それでも、今年の蟬はみんな油蟬でしたから、しつかりとした羽に茶色の筋目をみせ、同色の茶色の紋様を確実に残していました。

「この家には網戸はないの？」と不思議そうな声がありました。「虫も、高くてやって来ないから」とわたしは小さい声でいいました。

これで、何もかも、ぴつたりと、ジグゾーパズルのよに、収まってしまいます。深夜、羽ばたきながら、わたしの枕元に舞い降りた蟬のはなしも、熱中症から救われた話も、二日間蟬の夢を見続けた話も、きれいさっぱり、現実の話としてジグゾーパズルのように、はまりこんでしまいます。わたしは、見ていなくても、感じていたにちがいないのです。

それでも、なお、わからないことがあります。でも、何故三年も、こんなに多くの蟬に、突然、出会うことになったのか？ 近所の人にそれとなく聞いても、蟬の訪問を受けた形跡はないようです。

現実のこととして、その後も、今年はお盆の後も、28、29、30、と、玄関ドアから確かにはいり、ハイビスカスの木に止まって、眠り、リビングの窓から元気よく飛び立っていったのです。

何らかの世界、心でも、魂でもよい、精神世界が死後も科学的に存在することを、島さち子は伝えているのではないかと思われてなりません。彼女が「いとしのカメレオン」で予言したように。

科学的に解き明かされるまでは、すべてが、不思議な、不思議な物語になってしまうのではないのでしょうか。来年

も、このブログが続いていたら、興味を持って接して下さったみなさんに、ご報告できるのですが……。

— 2010.11.5 — Am8.30 — エンマ